

親鸞仏教センター主任研究員定例講座

『歎異抄』思想の解明 第Ⅱ期・第4回（通算第11回）

第一章——先師口伝の大道（4）

加来 雄之

第一章

蓮如本	（安良岡康作『全講読』、ただし〔〕記号と傍線は加来が補った。）
一 弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。 弥陀の本願には、老少^ま善悪のひとをえらばれず、たゞ^え信心を要とすとしるべし。 そのゆへは、罪惡深重・煩惱熾盛〈至常〉〈ししやう〉の衆生をたすけんがための願にまします。 しかれば、本願を信ぜんには、他の善も^え要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。	一 阿弥陀仏の〔お立てになった〕誓願の、人間の思量を超えた、絶対的な力にお助けをこうむって、「浄土に往って生れることを果たすのだ」と信じて、〔口に「南無阿弥陀仏」という〕念仏を申し上げようという<u>思いが生ずる</u>時、即座に、一切の衆生を受け入れて救い取り、お捨てにならないというご利益に人間をお参加させになるのである。 この阿弥陀仏の根本の誓願におかせられては、老人と若い者、善い人と悪い人とおえらびにならない。〔ひとにとっては、〕ただ一つ、〔<u>その本願への</u>〕信心だけが必要なのだとよく心得なくてはならない。 そのわけは、犯す罪惡が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。 従って、弥陀の本願を<u>信じようとするに</u>当っては、ほかの善い行いも必要ではないのだ。念仏より優越する善い行いはないのであるから。また、悪い行いをも恐れてはならないのだ。阿弥陀仏の本願を妨害するほどの悪い行いはないのであるから。 ……

I 前回までの振り返りと前回の質問への応答

(1) 前回までの振り返り

- ・『歎異抄』における第一章の位置——総説、「先師口伝の真信」の仏道
- ・第一章第一段「弥陀の誓願不思議に」の主題

・第一章第二段「弥陀の本願には」の主題

(2) 前回の質問

Q: 「1.本願について。安田先生は、願本です、とおっしゃっていただいたと思います。いかが、お感じですか。私は、願本:大もとから願いに、うなづけます。」

☞ 本の二義、因本と根本について。如来の本願と人間の願望について。

Q: 「罪惡深重と煩惱熾盛の区別がよく分かりませんでした。貪欲や瞋恚という煩惱がさまざまな罪惡の元になっているという理解ではまずいのでしょうか。」

・「罪惡は、痛みがないとの講義でしたが、そうでしょうか？罪惡も痛みがあると思います。アジャセも一例だと思います。」

・「罪惡の問題については、この今生（私の場合は四十余年……）という短いスパンではなく、もっと長い時間軸の問題を指していると感じます。例えば化身土巻では「無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり、見仏の善根を種えざる人なり」（358 頁）とありますが、目の前にある仏陀の教説を仏説として受け止められないという、自身では如何ともしがたい問題（仏智疑惑）を指しているのではないかと感じられますが如何でしょうか？」

☞ 罪と惡と煩惱について。惑、業、苦について。無明の闇を破る。罪障を滅す。惡を転ず。煩惱を断ぜして涅槃を得など。「罪惡」の「深重」性とはどのような感覚だろうか。

Q: 「「信心を要とすべし」ではなく、「要とすと知るべし」とあるのが、いつも気になっていました。如来の働きに自分を見いだすとお話しがありましたが、これこそが「知るべし」ということでしょうか。

☞ 「念仏為本」と「信心為要」の関係について。ここの「知るべし」は、漢字であらわすと、「可知」（「信巻」『真宗聖典』二二三頁）か、それとも「応知」（化身土巻、『真宗聖典』三三一頁）か。『教行信証』の「信巻」と「化身土巻」の問答の表現を通して考えてみたい。

Ⅱ 第一章第三段——善惡へのとらわれをこえて

【第三段本文】

しかれば本願を信ぜんには 他の善も 要^{エウ}にあらず 念仏にまさるべき善なき
ゆへに 悪をもおそるべからず 弥陀の本願を さまたぐるほどの悪なきゆへ
にと云々

【第三段科文】

- ・了祥 第三段 「しかれば」 対異義固執 初、挙本願警覚
二、正解善惡執
- ・曾我量深「第四段「しかれば本願」現生不退を結す」

【第三段検討】

(1) 第一・二段から第三段への主題の展開

- ・如来の願と衆生の信との関係

第一段「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて……信じて……こころのおこると
き」、

第二段「弥陀の本願には……ただ信心を要とすとしるべし」、

第三段「しかれば本願を信ぜんには」

☞「先師口伝の真信」

(2) 「しかれば本願を信ぜんには」

「しかれば」は、直前の文だけではなく、これまでの叙述をすべて受ける。

「ぜんには」の二つの解釈

「本願を信ずるならば、」

「本願を信じようとするには、」

多屋頼俊「弥陀の本願を「信ずる」については…何の条件も必要ではない」（『歎異抄新注』
一七〇頁）、安良岡康作「信じようとするには、信じようとするに際しては。「に」は、時・
折・場合を表す助詞。」（『歎異抄全講読』五十一頁）

(3) 第十一章との照応

「つぎにみずからはからいをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけ・さ
わり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみ
て、もうすところの念仏をも自行になすなり。」

本願を信ずる……誓願の不思議をたのむ

善……往生のたすけ

悪……往生のさわり

(4) 善悪と信心

「他の善も要にあらず」……念仏と諸善

「悪をもおそるべからず」……本願と罪惡

「本願を信ぜんには」、どのような自力の善も必要ではない。念仏という仏（勅命）を心に刻み思い出すことにまさる善（如来に向かわせる行為）はないから。またどのような（世・出世の規定する）悪もおそれることではない。阿弥陀という名で象徴される如来の本願の不思議さを妨げるほどの悪はないから。

・弥陀の誓願不思議にたすけられて弥陀の本願を信じる心は、「みづからはからい」に立った定散自心、信罪福心ではない。

(5) 善悪をこえた現生不退をあらわす？

「歎異抄は恐らく現生不退の内容を最も明瞭に示されてある。…」(曾我量深『歎異抄聴記』二十八頁)「しかれば」から終わりまでは第四段で現生不退を結す。…二種深信をはっきりとして、現生不退といふことを実に明瞭に示されてゐる。善悪について現生不退を顕されてあるのが特徴である。」(同六十九頁)

=====

Ⅲ 『歎異抄』第一章に展開する思想の解明

・『歎異抄』は、「歎異」という方法によって、「先師口伝の真信」を実現もしくは回復するための著述である。

・『歎異抄』第一章は、その仏道の総説する位置をもっている。『歎異抄』に展開する内容はすべてこの仏道にもとづいている。その仏道とは、序における「先師口伝の真信」を実現する仏道である。

・とくに『歎異抄』における「不思議」という概念への注目……第十章、第十一章

・第一章と第十一章との照応関係——近角常観「前後照応歎異抄」の説をうけて

第一段との対応

「十一文不通のともがらの念仏もうすにおうて、「なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」と、いいおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいいひらかずして、ひとのこころをまどわすこと、この条、かえすがえすもこころをとどめて、おもいわくべきことなり。」

「まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみづからはからいまじわらざるがゆえに、本願に相應して、実報土に往生するなり。」

第三段との対応

「つぎにみづからはからいをさしはさみて、善悪のふたつにつきて、往生のたすけ・さわり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみて、もうすところの念仏をも自行になすなり。」

ここには不思議ということさえもひとつの見解（義）するありかたが示されている。

・「こころのおこるときすなわち」について

①信の一念……即

②行の一念……則

本願成就の文、『経』（大経）に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上（「信卷」『真宗聖典』二一二頁）

「『無量寿経』の中に、あるいは「諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転」と、ときたまえり。……「至心回向」というのは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。「願生彼国」というのは、「願生」は、よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。「彼国」は、かのくにという。安樂国をおしえたまえるなり。「即得往生」というのは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころに攝取して、すてたまわざるなり。「摂」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。」（『一念多念文意』『真宗聖典』五三五頁）

・「おもいたつこころのおこるときすなはち」……安田理深「時熟」

おおよそ往相回向の行信について、行にすなわち一念あり、また信に一念あり。行の一念と言うは、いわく称名の遍数について、選択易行の至極を顕開す。

かるがゆえに『大本』（大経）に言わく、仏、弥勒に語りたまわく、「それ、かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と。已上

（『真宗聖典』一九一頁）

「一念」は功德のきわまり、一念に万徳ことごとくそなわる、よろずの善、みなおさまるなり。「当知此人」というのは、信心のひとをあらわす御のりなり。「為得大利」というのは、無上涅槃をさとりゆえに、「則是具足無上功德」とものたまえるなり。「則」というのは、すなわちという、のりともうすことばなり。如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひらく法則なり。法則というは、はじめて行者のは

からいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいうなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則とはもうすなり。」

(『一念多念文意』『真宗聖典』五三九頁)

第一章加来試訳

蓮如本	加来試訳（安良岡訳を参照）
一 弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。 弥陀の本願には、老少善悪〈マク〉のひとをえられず、たゞ信心を要〈えう〉とすとしるべし。 そのゆへは、罪惡深重・煩惱熾盛〈至常〉〈ししやう〉の衆生をたすけんがための願にまします。 しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要〈えう〉にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへにと云々。	（第一章）一 阿弥陀〔如来〕の誓願の不思議さにお助けをこうむって、「〔阿弥陀如来の世界に〕行き生れることを果たすのだ」と信じて、〔口に「南無阿弥陀仏」という〕念仏を申し上げようという心が<u>発起する</u>時、即座に、〔阿弥陀如来の〕一切の衆生を摂め取り、お捨てにならないという利益〔＝人生の意味〕に〔その人を〕お参加させになるのである。 〔この〕阿弥陀〔如来〕の根本の誓願におかせられては、老人と若い者、善い人と悪い人とをお簡びにならない。ただ一つ、〔如来の本願による〕信心だけが必要なのだとよく心得なくてはならない。 そのわけは、罪・悪が深くして重く、煩惱の勢いが非常に盛んな、一切の生き物をお助けになろうとするための願であらせられるからである。 従って、弥陀の本願を<u>信じようとするに当っては</u>、ほかの善〔い行い〕も必要ではないのだ。念仏より優越する善〔い行い〕はないのであるから。また、悪〔い行い〕をも恐れてはならないのだ。阿弥陀〔如来〕の本願を妨害するほどの悪〔い行い〕はないのであるから。このように〔親鸞聖人は物語られた。〕